翻訳・翻刻

翻刻『花月集』

Republication of the 'Kagetsu-shu'

大西紀夫
OONISHI Norio

［解説］

『花月吟』は、富山町在住の旧派の宗匠が中心になって出来た俳書である。この宗匠達は集中に肖像を載せる。順に次の通り。

五斛庵瓠舟／水香亭愛／瓢中庵茶仏／洞遠舎愛宣／清軒文山／丿〳〵庵香蝶　※註1

この内、編者の香蝶の丿〳〵庵は、富山在中の俳人の庵号で、江戸中期の麻父に始まり、その跡は息子の玉父（斧）が継いでいたが、それ以後は不明であるが、明治になって香蝶が継いでいたのである。

ちなみに、これらの俳人の句は次の句集に載る。

芭蕉二百回忌追善集『いなみ集』（明治二十七刊）には、

水香亭愛

しぐるゝにかろき凌ぎや檜笠

瓢中庵茶仏

時雨忌や音にはじる我白髪

洞遠舎愛宣

枯尾花野にも此にもけふをまつ

丿〳〵庵香蝶

尊さやひろきはせをの御魂碑

霜井編『こけのはな』（明治三十八年刊）には、

水香亭愛

閼伽桶に清きを汲みて杜若

清軒文山

俤の見ゆるやうなり青すだれ

絵師国一（越堂）

挿絵を描いた国一（くにかず）は、当時富山で活躍していた絵師尾竹越堂（名は熊太郎、慶応四年～昭和六年）のこと。新潟出身で、妻の実家が富山であったので、移住して絵師の仕事をしていた。国一は、近代の画家と違って古い型の絵師で、職人気質が徹底しており、お客から注文があれば、どのような絵であれ拒むことなくそれに応じたようである。富山時代の十年間（二十三歳～三十二歳）は、まだ若くてそれほど知られた絵師でもなかったろうし、富山ではそれほどの知り合いもなかったろう。したがって、生活の為であればどのような絵であれ、手を染めたのである。中でも売薬版画は注文も多く金になったのであろうか。

尚、越堂は、売薬版画以外には、新聞の挿絵、行燈絵、押絵、幟の下絵、絵馬などが、今日確認されている。今回翻刻した『花月集』では、俳書の挿絵を描いていたのであるが、これが国一のものとして、確認の出来る唯一のものではなかろうか。国一が、四季の風物を描いた、いわゆる俳画のようなものも描いたことが、大変興味深いことである。

おおにし　のりお（経営情報学科）

絵師と俳書（絵入り俳書と絵俳書）※註2

富山の絵師で挿絵を描いた俳書には、次のようなものがある。

富山藩お抱え絵師山下守胤には、

『春興之句帖』（弘化四年序　一八四七）西畝編

守胤の弟子の松浦守美（応真斎守美）には、

①『俳諧多磨比路飛』（たまひろひ）（安政三年刊）

②『俳諧画讃百類集　一』（安政三年刊）

③『俳諧画讃百類集　二』（安政四年刊）

④『俳諧画讃百類集　三』（安政五年刊）

⑤『八重すさび』（安政六年刊）

⑥『俳諧四季織』（刊年不明　明治初期か）

高岡の絵師堀川敬周には、

『己之中集』（こしなかしゅう）（天保五年刊　一八三四）

書　誌

書型　一冊。縦19・0×横12・5（糎）。石版摺。

表紙　布目地。

題簽　左肩「花月集」縦9・8×横2・8（糎）。

内題　なし。

柱　なし。

序　五斛庵瓠舟序（明治甲午二十七年）一八九四年

跋　瓢中庵主人　茶仏

刊記　なし。

行数　序　半葉八行。本文　七行～十二行。全十七丁

伝本　富山県立図書館　射水市立新湊図書館　大西紀夫

挿絵　十五図（国弍画）※国弍は尾竹三兄弟の長男の国一。越堂とも号す。

尚、翻刻にあたり、旧字体の漢字は新字体に改め、私に濁点、句読点を施した。

花月集序

其花に鳥に月雪に四時の移りゆく
に随ひ見るもの聞ものに感じて思ひを
述べ吾も娯み人をも楽ましめ超然座
表に遊ぶは俳諧正風の大旨也。されば此
集を物せし〳〵ノ庵うじの意も蓋
茲にあるかと一言以て序となす

明治甲午七月上澣　五斛庵瓠舟撰　印」（一オ）

羽根突きの図

亀浮や一房とゞく藤の花　ノマチ　雄峰
花ちらす風も柳の詠めかな　仝　雄水
若水を汲やほのかに山かつら　フシキ　孤芳
何かもの言ゝたきさうな蛙かな　仝　清月
鶯や右と左のわかれ道　仝　清節

一木の花の明りや松の魚　ナゴウラ　呉月」（一ウ）
宵の雨握りて伸る蕨かな　クロサキ　一亀
見た程は咄せぬ花の夕べかな　仝　雨暁
梅咲た咄しも気のゆるみけり　楡原　松堂
春風やどちら吹ても和らかに　コスギ　松村
日の出から声の隙なき雲雀哉　仝　石峰
畑打や鍬を置にも気の配り　東イワセ　笛琴
花の夜や月を待間に舩支度　ト山　秋月」（2オ）

桜と松の山の図

かゝやきも匂ふ斗りぞ月と花　尾張ナルウミ　秋潮
回文　もとのなはしらしみしらしはなのとも　東イワセ巨柳
元日や隔てなき身の改まり　東水はし　旭桜
遊ぶうち残る一トツや孕鹿　ウヲズ　チカ女
鶯の曇らぬ声や雨の朝　三日市　慶成
よい処に窓ある梅の匂ひかな　ト山　松月
白雲の動かぬ花の盛りかな　小杉　喜水」（2ウ）
菜の花やうか〳〵と出て野に暮る　泊　梅邨
余念なき声や羽音や梅の鳥　仝　松涛
唯居てもよき夜を月の櫻哉　仝　碩斎
一日の隙を貰ふて花見かな　石金　春園
夕かげや軒の燕の幾かへり　ト山　春町
草の戸やまた冬なりの梅の花　仝　遊甫」（3オ）

魚に牡丹の画

つき纏ふ蝶のちいさき牡丹哉　在上市　竹母
麦飯の馳走に並ぶ蚊遣かな　新庄　淮水
草先の風やゆられて飛蛍　魚津　犀帰生
日に近くなる程寒し富士詣　飛騨　一声
一畝ほど庭にも慾しき青田かな　仝　一枝」（3ウ）
手に結ぶ水に影あり夏の月　入善　晴海
炎天の中もたゆまず蟻の道　仝　成器
松葉たく家は自然の蚊遣かな　泊　翁軒
早泊りして夕立をながめけり　仝　子厚
松にふく風そよ〳〵と青簾　三日市　静岳」（4オ）

蛍籠に団扇の画

荒雨の夜も来て叩く水鶏哉　金沢　梅湫
蚊のすまぬ水音清き山家かな　婦負郡　居山
立枯のしたる木もあり閑古鳥　八尾　其翠
二日見ぬ若葉もくらき鳥居哉　仝　夕月
蓑りする鷺の気長し五月雨　仝　旭梅
夕立や砂のほめきの一トしきり　ホリカセ　耕山」（4ウ）
日に伸て鷺の背低き青田かな　ホウカセ　春蝶
山陰に昼の月すむ清水哉　射水郡　文園
虫干や一寸たゝへて出す鼓　伏木　抜陰
樹ゝの葉の動かぬ空や雲の峰　四方　喜卜

宿引の招く愛想の団扇かな　東岩瀬　暫居」（5オ）

瀧に鷺の図、水辺に鷺の画

凌宵や人の来ぬ日の花ざかり　小杉　箕山

辛崎の松みに行かんはつ袷　仝　北如雲

買ふてさへ貰ふ気持や初茄子　仝　安正」（5ウ）

去年の秋思ひは近し初蚊張　寒本郷　香蓮

奥深き灯もてら〳〵と茂りかな　小杉　竹水

鶯や流石老ても高調子　仝　菊園

跡ずさりして先へ出る田植哉　仝　桜園

家買へば幟ゆびさす太郎かな　仝　観山

松風の音を包むや蝉の声　仝　其徳

未だくれぬ先より蚊屋の楽寝哉　仝　哦山

美しや今見時なる芥子の花　高岡　加年」（6オ）

芒に野菊の図

星合やたつた一夜の更て行　京行脚　須臾

宿かさぬ寺やすげなき夕紅葉　ノト松波　稲波

吹れては日向へ出るや秋の蝶　入ゼン　柳翁

菊の香やまだ明きらぬ釣灯　東水橋　静岸

乳さぐる子に眼のさめる夜寒哉　クロサキ　一峰

心よく晴て名残の月見哉　シン庄　如伯」（6ウ）

朝顔にうつり合けり露の玉　松ノ木村　梅亭

朝寒やこゝろにひゞく川の音　ヤツオ　雲龍

聞人の思ひ〳〵や虫の声　ノマチムラ金剛栄太郎

東雲や次第に虫の鳴初る　東イハセ　雲扇

貰ふた手にも残るや唐辛　東イハセ　和友」（7オ）

帰雁の図

葉もちさう成て紫苑のさかり哉　カヽ　賢外

日車のまはらんとして秋の風　ヽ　甫立

昼の蚊に膝打をりや桐一葉　松鶯

名月や雲はあれども余所の空　京　犁春

鳴鶉坐につく晋茶の栞かな　ヽ　梅雄

その色に秋たしかなる桔梗かな　ヽ　楓崖

風清し月に富たる山の秋　京　楓城

雁鳴や波の中なる洲先の灯　ヽ　露翠」（7ウ）

千里かけ翅ならべて天津雁　ヽ　静起

葺替の藁屋根高し柿紅葉　ヽ　琴湖

ゆつたりと朝日さしけり露のうへ　ヽ　好室

白萩や遣ふなれたる竹床几　ヽ　岱逸

連城の玉はものかは月の露　ヽ　白髪」（8オ）

水に泳ぐ鴨の図

富士は唯白し晴ても時雨ても　ト山　香菊

町並もよい月夜なり鉢叩　小木港　扇洋

勇ましきふりの見ものや鯨つき　ヨカタ　素文

打返す波をあやとる千鳥哉　ヤツオ　亀山

空近う見ゆるや雪の一たいら　仝　文栄」（8ウ）

いくらひもなき気色なり冬木立　仝　文積

静さや川瀬うめこむ夜の雪　トナミ太田　桃李窟
曳舩の呼声高き霜夜哉　イミズヨシヒサ　磯陰
珍らしき色にも成るなり雪の朝　イマイスルギ　和翠
桐の実のころ〳〵なるや冬の月　ヒタフナツ　一皈」（9オ）

雪ダルマの図

岩山も丸う見えけり雪の朝　奈呉ウラ　呉洲
煤はきや寒さうに鳴く巣の鼠　仝　米甫
踏かけて見たれど雪の丸木橋　東イハセ　虎楽
能見れば降たむらある時雨かな　クロサキ　一渓
酒の燗通り過けり大根引　東水ハシ　梅窓
明りとる工夫をなして冬構　入セン　越水」（9ウ）
いそぐなら人の尾につけ雪の道　トマリ　雪香女
新世帯もちて世話しや年の暮　仝　桃場
見ゆる物川一すじや雪の原　シン庄　稲香
餅搗や隣の子等も眼を覚す　イハセ　赤子」（10オ）

水差しに松と梅の図

山吹や見へぬ流の音のよき　ト山　雲鈴
涅槃会や衣の袖も雲の果　梅園
柳には動くかげなし春の月　其蘆
新道は幾すじもあり花の山　杏堂
夢結ぶ蝶の羽ふりや枕橋　石園
七草の名をゆび折て覚へたり　梅隣
呉羽から一眼に花の千本哉　芳斎」（10ウ）

行春やふつと眼につく扇折　晴洲
猿曳や日終猿に遣わるゝ　可六
山吹やけふは名残の炉の手前　立売
梅咲て猶も尊し神の庭　六十九齢　のぶ女
松風も音よき朝や夏となり　梅柳
鶯や姿見せねどよいはつ音　三湖
落つきは上野の方かほとゝぎす　山本　梅香」（11オ）

柳に雀の図

春なれや月にくづるゝ雪の音　ト山　蓮葉
陽炎や楽焼坫の下タ仕事　松雨」（11ウ）
松に棚かりて程よし藤の花　柳楽
漣にしたしき岸の柳かな　旭柳
家づとの咄しも多しけふの花　山峰
万歳や笑顔にかくす顔の皺　脩竹
雉子鳴や動くやうなる野ゝ一木　知峰
十分に心こめけり種おろし　青雀
山吹の咲や眠気のつく時分　潮風
笠ぬげば皆しる人よ小鮎釣　如水」（12オ）

河骨の図　国弐の印

木綿じまながらも軽し初袷　北窓
更て行笛の遠音や夏の月　文隣
人里の水音ゆかし夏木立　松花
鬼瓦ぬつと顔出ず若葉哉　花や郁兵衛

舟丶を見おろす橋の涼み哉　閑静
かさねしは恋の重みか筑摩橋　桂甫
聞程の事も咄しよ鍋祭　蘭香
虫干の鎧きたがる子供かな　文醜」（12ウ）
炎天や音も静な浪の色　扇風
吹風はどちらでもよし夏座敷　蘆舟
かわほりや田植仕舞の夕月夜　故人　三桃
朝焚に最う間もなしほと丶ぎす　可生
道野辺や清水の端しの忘れ杖　上市　暁鶯
まんなかに置てめし喰ふ蚊遣り哉　トナミ　友知」（13オ）

鹿に紅葉の図

一人り居て聞夜は近し鹿の声　小笠
桟や霧の底行水の音　池羅
糸萩やつなぎ留たる露の玉　了夢
菊の香ややまとしまねの浪たゝず　遊斎
日和見に出れば暮けり秋の山　博古」（13ウ）
白露やまた東雲の片明り　菫圃
稲妻や沈だ鳰の出る眼先　春塢
名月や心も清き庭の池　霜幹
待甲斐もありて嬉しきけふの月　和文
瀧尻に錦をなすや濃紅葉　青柳
蝙蝠や入合は皆いそがしき　安井　梅香
送り火の消て月さす流かな　誠月」（14オ）

狐に万両の木の図

節分や豆ならばこそ鬼は外　魯山
淵も瀬も知らぬさま也浮寝鳥　三亥
幾かまと廻るぞ雨の三十三才　一和
垣竹のま丶家根ふくや水仙花　誠雪
須磨明石浮寝にしてや友千鳥　素白
時雨るや鞍馬あたりは日に幾度　業貞
跡からの客も好なり納豆汁　其北」（14ウ）
此奥に一住居あり雪の道　梅雲
鶯の声も聞たき小春かな　其水
戸をしめて心残りぬ冬の月　秀岳
凩に声のしほりや小夜千鳥　羽白
足跡は慥につるよ今朝の雪　松井　呉江」（15オ）

六人の宗匠の画

麦苅や筑波見あげて一ト烟　五斛庵瓠舟
眼の先へ星のさいぎる霜夜かな　水香亭愛
又ながき月日やたのしうめ柳　瓢中庵茶仏」（15ウ）
わたる雁越路の芦間〳〵かな　洞遠舎愛宣

淋しさをとり直しても秋のくれ　清軒文山
惜む夜に楽しみもあり除夜の鐘

ノ〳〵庵香蝶」（16オ）

盃と哥と替へけり花の山　ヒダ船津　一皈
二の堞となればさわがし草の原　魚津　公好
葉柳や息杖たてゝ篩売　仝　春峰
落る時雲ゝも入らず冬の月　仝　子猷
行年や千鳥は波に鶴は田に　仝　仁風
寺訪へば馬奴のゆびさす若葉哉　仝　含春
花折て蝶の眠りを覚しけり　入善　成器
時雨るや折ゝ明るき雲の奥　仝　柳翁
片山は白し月夜の蕎麦の花　泊　子厚
青柳や舩から島へひく烟　楡原　松堂
広がるは稲の波なり布施の湖　小杉　箕山
出たまゝの姿なりけりはつ蛙　仝　蘭女
常になき仮ばしかけて麦の秋　仝十才菊女
叱らずに牛を追行日永哉　仝　菊園」（16ウ）
谷を出る杣の咄しやはつ桜　仝　喜水
合傘も都ぶりなり雨の藤　仝　仝
さる程に年の誉や稲の出来　能町　雄峰
うつ波のゆたり〳〵日永哉　吉久　磯蔭
はつ秋のちからの富士や五月雨　婦負郡楡原　居山
柱にも根ありて咲や花見茶屋　仝　居山
木枯しや松のかれ葉をすぐりゆく　卜山　愛松女
紅梅や寺の小姓の椽づたひ　仝　愛竹女
菜の花に山の影をく夕日かな　仝　愛菊女
思ひ出す昔の花や土用干　仝　千代女
岩角も崩れさうなり藤の花　仝　晴洲
枯て音高き時雨の芭蕉かな　仝　桂甫
数奇屋笠濡て匂ふや朝若葉　仝　花や郁兵衛」（17オ）

（跋）

老たる友は年におとろへ、若き人たちは月に進み
いよさかんなり。さはあれど風雅は四時に従ふて世々
かはる事なく、こたびノ〳〵庵の
あるじ花月の題を設けて老若貴賤のわいためなく、蕉門に
遊ぶをちこち人の発句をかり集、友垣ひろく
なさむとす。そが風流心のめでたきをよろこび
つゝひそかにこれを跋す。

瓢中庵主人識　印　茶仏」（17ウ）

此花月集は座列を選ばず。
只、御出吟の以順を小一冊にあみ

猶玉句の内、誤りあらば御ゆるし
給はん事節になむ
周旋方
頓首

註

註1　六人の宗匠の画

註2　本文よりも絵の方が多いものを、絵俳書と言い、絵の少ない挿絵程度のものを絵入り俳書と呼ぶならば、松浦守美の①、②、③は絵俳書と呼んだ方が適切である。

（平成25年10月31日受付、平成25年11月15日受理）